

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
夏目 安男 <small>やす お</small>	男 性	1 5 歳	豊田市 (新城市海老)

「無惨だった開拓団家族」

「東三河郷開拓団からの手紙」

「平和の礎Ⅱ」より (部分修正)

昭和15年9月、私が10歳の時でした。南設楽郡海老町四谷より父に連れられて、母と妹の家族4人で日本国を後にしました。旧満州国龍江省甘南県大平山村三合屯、第九次東三河郷開拓団に着きました。そこは広く淋しい荒野で、シベリヤおろしの冷たい風が枯れ草をなびかせていました。はるか遠くに開拓団の部落が点在して見えました。日本で思っていたような花咲く楽土の広野ではなく、所々に水がたまった沼があり、遠い道を馬車の後について何時間も歩きました。夕日の沈む頃に、やっと土盛りの塀に囲まれた部落に着きました。そこには粗末な服装をした満州の人たちがいました。家は草屋根の泥壁で、部屋の中には日本の古新聞を壁と天井に貼ってありました。

私たち同士は、旧満州国開拓団として北辺の厳寒地に農業開拓の鋤を打ち振って作業しました。大地に根づいた生活の第一歩を踏み出し、開拓も何とか進み始めました。3年もすると実りのある生活がやっとできるようになり、一家団らんが現実のものとなりつつありました。そんなときに、日本は大東亜戦争で一敗地にまみれ、無条件降伏という世にも無念な敗戦を味わうことになったのです。



広大な農地 東三河郷開拓アルバムより

敗戦後の旧満州の地における私たち開拓団家族の無惨さは、この世の地獄絵図さながらで、目を覆うばかりでした。終戦直前まで男という男はほとんど軍人として召集され、残された者は老人と幼児、子供を抱えた婦人ばかりでした。終戦とともに状況は一変しました。私たちは、侵略国の日本人集団として残されたのです。銃器が手元にある間は、まだ土匪族の襲撃はありませんでしたが、中国公安隊自治委員会等によって銃器を撤収された後は、朝に夕べに土匪、匪賊のわがもの顔の振る舞いに任せるより何の策もありませんでした。そのうえソ連兵の侵入が加わりました。平和であった日本人居住地は無頼の荒野と化し、居住地を追われて着る物もなく食糧も金もなく、無一文で西に東に流浪の旅に立つしかないという窮地に陥りました。それはそれは、言葉では言い表すことができない辛いこ

とでした。

私たちは昭和20年10月、第2の故郷こきょうと定めて500余名が村づくりの根を下ろした三合屯の開拓地を明け渡し、20km離れた熊本県出身の東陽開拓団に合流し、お世話になりました。各人が齒を食いしばって故国ひあ引き揚げまで何としても生き抜こうと頑張っていたのですが、着る物がなく、生きるに食糧もなく、病気になっても薬もありませんでした。このような時に発疹チフスが蔓延したのです。施すすべもなく、この間に老人、幼児をはじめとして多くの団員家族たちが、何が何でも日本引き揚げまで生き抜くと必死の叫びを上げながら、次から次へと死出の旅路へ立つのでした。四面楚歌、孤立無援はつしんの中に生きる日本人の哀れにも悲しい人生行路でした。それでも私たちは絶対無抵抗主義に徹したためか、何とか中国の終戦後の大混乱だいこんらんの中を生き抜くことができたのでした。

私たちは、昭和20年末に日本へ引き揚げることができました。しかし、一般いっぱんの引き揚げ者とは違い、渡満時に経済厚生分村計画に基づいて、財産処分をした上で家族ぐるみの渡満でした。ですから、日本に帰ってもどこにも拠点きよてんがなく、寄りかかる何物も持たない人たちがほとんどで、まったく困難を極めたものだったのです。

私は、1980年9月と1990年9月の二度、日中友好親善愛知県訪中団として中国東北地区黒龍江省甘南県查哈陽農場で、開拓者残留孤児ざんりゆう こじ12名と会食し、懐かしく話し合うことができ、現地で慰霊祭いれいさいも行うことができました。

平成2年11月

(記録者 藤田 学さん)